様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６　月　１日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18720164
研究課題名（和文）　近世日本像形成過程の基礎的研究―通詞集団の視点から

研究課題名（英文）　The basic research on the image of early modern Japan: from the view of the Japanese interpreters

研究代表者
氏　名（アルファベット）　木村　直樹（Kimura, Naoki）
所属機関・所属部局名・職名　東京大学・史料編さん所・助教
研究者番号　40323662

研究成果の概要：
18・19 世紀に海外における日本社会像が受容される過程において、伝達回路として、通訳集団である長崎の通詞集団が重要であることに注目した。しかし、通詞集団については、その文化的役割についての研究が多くあるものの、社会的な存在のあり方については不明な点が多く、その具体的なありかたを解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	150,000	2,150,000

研究分野：日本史
科研費の分科・細目：
キーワード：近世・異文化交流・対外政策・通詞

１．研究開始当初の背景

近世末から近代に、欧米諸国における日本人論・日本社会論の形成過程を明らかにするためには、その知識の媒介者の役割を研究する必要がある。そこで、本研究では、基礎段階の研究として、日本社会論を海外に発信するにあたり、18 世紀中葉から 19 世紀初頭にかけて日本側において媒介者として重要な役割を果たした通詞（通訳）集団について、彼らの政治文化的側面が質的に転換していく過程を明らかにした上で、彼らを通じて、いかなる日本情報が発信されうる情況にあったかを分析した。

２．研究の目的

本研究では、十八・十九世紀に海外における日本社会像の伝達回路として、通訳集団である長崎の通詞集団に起点をおいて、日本社会・日本人論の日本国内での発信過程の解明を目指すものである。

３．研究の方法

本研究では、18・19 世紀における通詞の長崎という都市社会での社会的位置づけを明らかにするために、二つの視点からの分析を進めた。

第一に、都市社会における通詞集団の存在

形態。これは、町人が大半を占める長崎の都市社会にあって、通詞集団はどのような社会的諸関係を有し、それが通訳としての行動をどのように規定したかを明らかにしようとした。また同時に通詞の本来の役割である通訳者としての技量を集団としてどのように保持したのかということを分析した。

第二は、長崎聞役と通詞との関係。長崎において九州諸藩が設置した蔵屋敷は、聞役らによって統括され、その蔵屋敷に通詞は様々な関係を有して出入りしていることから、その関係性を個別具体的に解明することが必要と考え分析した。

以上の、二つの方向から通詞の存在形態を考察した。

４．研究成果

近世長崎の通詞の社会的存在形態については、文化・技術の媒介項として重要な役割を果たしてきたと従来の研究が証明してきた翻訳者としての通詞は、一方で、都市労働力の編成者としての役割を果たし、さらには、密接なその縁戚関係などから、貿易の実務との関係も深いことを指摘した。それゆえに、通詞を単なる翻訳者として理解すのではなく、当該期の貿易制度などとの関係を分析していく必要があるとした。特に十九世紀末の松平定信の寛政の改革の一環であった、長崎の貿易・都市支配の改革に、通詞たちは大きく翻弄されていったことを明らかにした。

また、近年日本近世史において、地域社会の研究の深化は目を見張るものがあるが、一方で、政治的枠組みからみた、設定のありかたも、無視できるものではなく、その枠組みの中で、日本情報の受容・発信がなされていたということについても、大枠を提示できたものと考え、さらなる視点を獲得できた。

具体的には、佐賀藩と長崎の社会との関係について注目し、長崎警備という近世を通じた佐賀藩固有の軍役負担は、一方で都市社会長崎との日常的な関係を惹起し、その仲介者として通詞や都市社会の枢要にいた町人との関係が生じており、その関係性から、ある種の日本情報、また有るときは海外からの情報が伝わっており、公的な長崎奉行―佐賀藩、すなわち幕藩関係にとどまらない、その関係性についても重要な視点となりうると考えている。

そして、方法に第二点に関わる、九州諸藩の蔵屋敷やその責任者たる長崎聞役については次のようになる。

長崎において九州地域との結節点となる九州諸藩の蔵屋敷との関係が重要であると考えた。特に藩の蔵屋敷については、その統括者であり長崎奉行との連絡役である聞役が 1640 年代に幕命によって各藩が派遣するようになったという従来の理解について再検討を行った。その結果、長崎奉行と各藩との個別人格的な関係は 17 世紀初頭から同世紀半ばまで存続し、必ずしも制度が成立したわけではなく、むしろ 17 世紀後半に長崎奉行就任者が、長期にわたり就任せず数年ごとに交代するという幕府の制度の変更こそが、各藩の長崎における聞役の制度化を招いたという結論に達した。

なお、本研究の成果は、2009 年秋刊行予定の研究代表者単書に反映する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

木村直樹、「18 世紀後半の日蘭関係と地域社会―天明期を中心に」、査読有、『歴史学研究』833、2007 年、75－84 頁

木村直樹、「2006 年度の歴史学界―回顧と展望　日本近世対外関係」、査読無、『史学雑誌』１１６－５、2007 年、133－135 頁

〔学会発表〕（計１件）

木村直樹、「18 世紀後半の日蘭関係と地域社会―天明期を中心に」、2007 年度歴史学研究会大会　近世史部会テーマ「境界領域からみる近世の国家と社会」2007 年 6 月 3 日、東京大学

〔図書〕（計１件）藤田覚編「近世の対外関係」藤田覚編『史料を読み解く３　近世の政治と外交』山川出版、2008 年、１１５－１４０ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
木村　直樹（Kimura, Naoki）
東京大学・史料編さん所・助教
研究者番号：40323662

(2)研究分担者

(3)連携研究者